第１章　三原市の概要

１　自然的・地理的環境

（１）位置・面積

三原市は、広島県の中央東部、福山市を中心とした備後圏域の西端、広島市を中心とした広域都市圏の東端に位置し、県内の２つの広域都市圏のいずれにも属し、２つの都市をつなぐ位置にあります。東西約 20 km、南北約 20 km、面積は約 471.51 ㎢で、広島県の 5.6％を占めています。

また、中国・四国地方のほぼ中心に位置するとともに、広島空港をはじめ、JR 山陽新幹線・山陽本線・呉線、三原港、山陽自動車道など主要交通が整う広域交通網の結節拠点でもあり、県内外の各地域と連携する上で恵まれています。

三原市の位置図

（２）地形

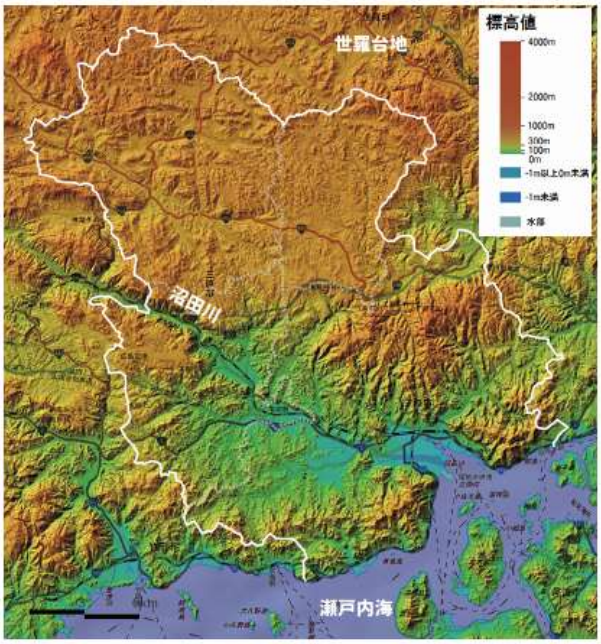
三原市は、市域の南部から北部にかけて、海、川、平野、山地へと移り変わる自然の多様性を有しています。

地形は、南部と北部とでは様相が異なっています。

南部は沼田川流域の平野に加えて、佐木島、小佐木島などの島しょ部を含む瀬戸内海と山地に囲まれた帯状の平野が広がり、北部は、世羅台地の一部をなす台地が広がっています。

瀬戸内海沿岸から本郷地域にかけての海抜100～200ｍの場所では、瀬戸内面（低位面）と呼ばれる平坦面が発達しています。

三原市北部の久井地域から大和地域にかけては隆起準平原が発達しています。海抜300～450ｍの花崗岩地帯に発達するこの平坦面は、世羅台地面（中位面）と呼ばれます。

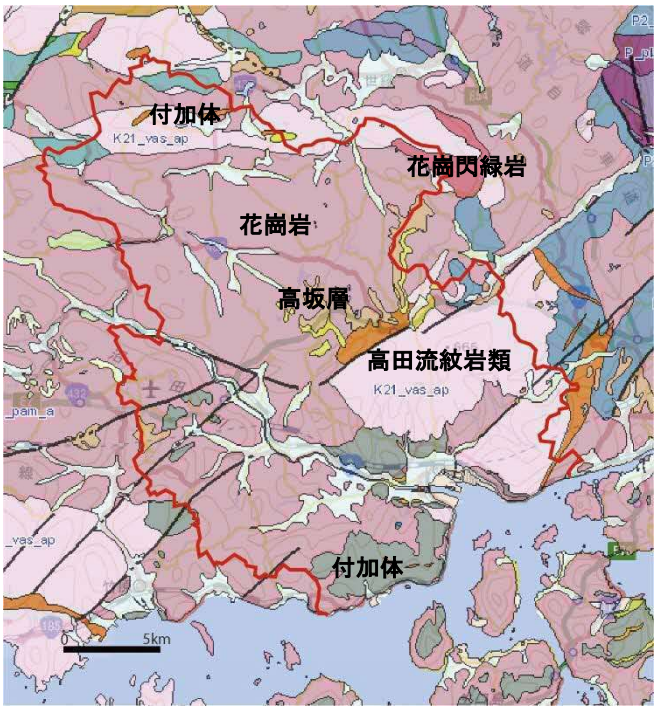


三原市の地勢（標高）
（国土地理院電子国土 Web）

三原市域に発達するこれら二つの平坦面は、三原市の地形を特徴あるものにしています。

（３）地質

三原市の基盤をつくる岩石は、三原市の北部の一部と南部に分布する付加体です。日本列島が大陸の東縁にあった古生代ペルム紀（2 億 5,000 万年前頃）から中生代ジュラ紀（１億 4,500 万年前頃）に、海洋底に堆積した地層が海洋プレートの沈み込みによりはぎとられ、大陸に付け加わったものです。泥質（でいしつ）岩やチャートなどからなり、石灰岩も見られます。



産総研シームレス地質図 V2 から作成（実線は断層）

高坂層＝古第三紀の堆積岩類

高田流紋岩類＝白亜紀・古第三紀の火山岩類

三原市で最も広く分布するのは、中生代白亜紀（はくあき）後期（8,000 万年～9,500 年前頃）の大規模な火成活動により形成された高田流紋（りゅうもん）岩類と花崗岩です。高田流紋岩類は、激しいカルデラ噴火を伴う火山活動で形成されたデイサイト質～流紋岩質の火山岩や溶結凝灰（ようけつぎょうかい）岩からなります。巨大な花崗岩の岩体は、地下に残った大量のマグマから形成されました。この花崗岩は三原市だけでなく広島県内に広く分布しています。久井岩海をつくる花崗閃緑（せんりょく）岩は、この巨大な花崗岩の岩体の一部で、8,600 万年前に形成されたものです。

白亜紀の激しい火成活動後の穏やかな新生代古第三紀（3,000～4,000 万年前頃）は、大陸河口部分であった時期で、礫岩・砂岩からなる高坂層が形成されました。高坂層は三原市中部の久井町周辺の世羅台地に分布し、亜炭や粘土が採掘されていました。

日本列島が大陸から分離した新生代新第三紀中新世（1,500 万年前頃）には、三原市北部でも小規模な玄武（げんぶ）岩質の火山活動が起こり、第四紀になると瀬戸内海の形成と山地の隆起が起こります。沼田川などの川沿いに深い谷が形成され、河口には砂や泥が堆積して沖積層が形成されました。

このような三原市の地質の特徴は、地質だけにとどまらず地形や人の営みの基盤をつくるものとなっています。

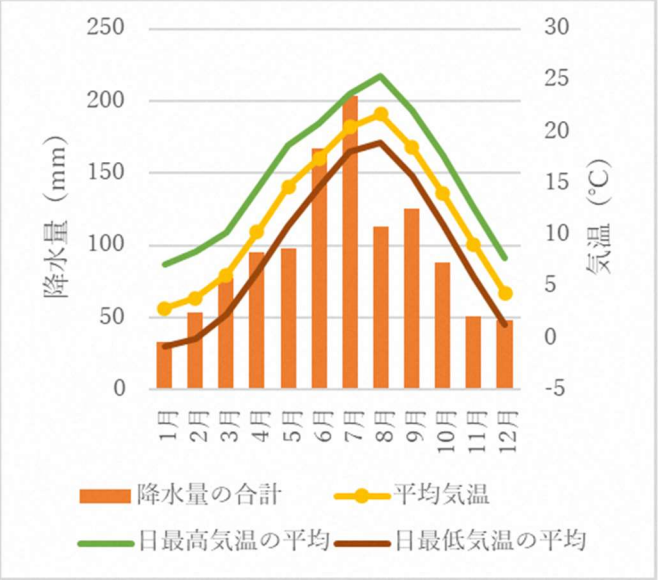
（４）気候

三原市は、温暖・多照少雨の瀬戸内海式気候に属し、穏やかな気候です。

南部と北部で気候が異なり、南部は県内でも温暖で小雨な地域です。一方、北部の山間部は、特に冬の寒さが厳しく内陸性気候に近くなっています。

平均気温は南北で２℃程度変わりますが、年平均気温は約15℃前後であり、冬季は約５℃となっています。

年間降水量は、南部で約1,200㎜、北部で約1,300㎜であり、梅雨と台風による影響が大きく、年により大きな変化があります。



三原市の気候　観測地点：本郷
1991－2020 年　観測値の平均をもとに算出
（気象庁ホームページ）

（５）自然環境

沼田川をはじめとする各河川流域に扇状地性低地が広がり、それを囲む丘陵部は山林となり、谷底平野などが耕作地となっています。

三原市森林整備計画（令和４年～令和 14 年）によると、三原市の森林面積は 31,429ha あり、市総面積の 67%を占めています。このうち人工林の面積は 3,404 haあり、樹種では、ヒノキ、マツの順に多くなっています。人工林率は、広島県の平均より低い 12%です。

河川については、最も大きな流域面積を占める沼田川水系や、他市町の水資源となっている芦田川水系などがあります。海岸については人工海岸が多いものの、佐木島など島しょ部には、自然海岸が残ります。

また、三原市環境基本計画（改訂版）によると、三原市では植物69種、動物83種の希少生物が確認されています。これら希少生物は沼田川流域や久井地域、大和地域に多く分布しています。

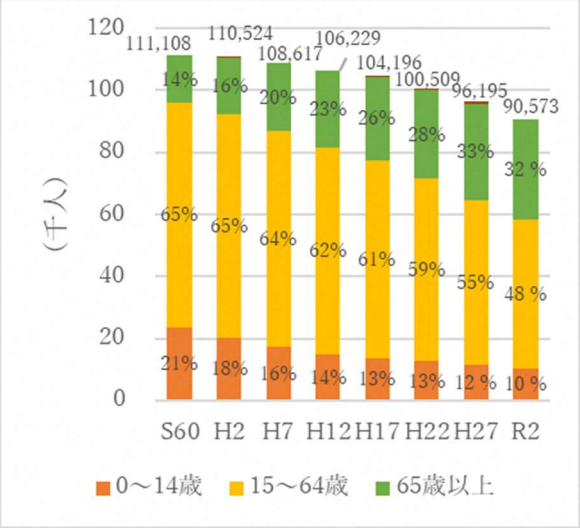
2　社会的状況

（1）人口動態

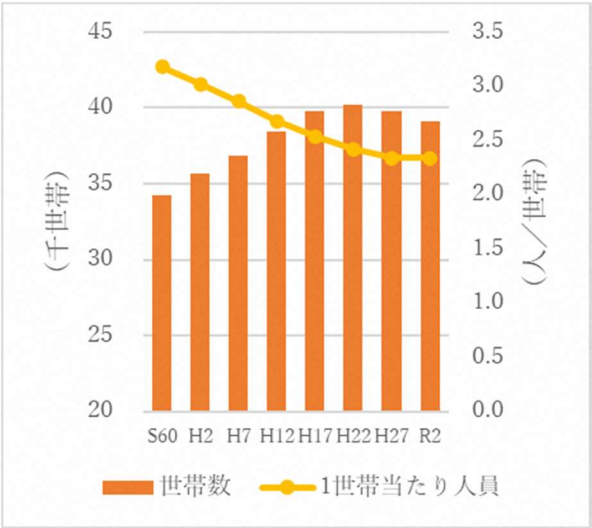
三原市の人口は 90,573 人（令和２〔2020〕年　国勢調査）です。昭和 60（1985）年以降、減少を続けています。平成 27（2015）年の高齢化率は 33%で、広島県の 27%と比べて高く、また 15 歳未満の年少人口は 12%で広島県の 13%よりも低い状況にあり、県内でも少子高齢化が進んでいます。

世帯数は平成 22 年まで増加傾向でしたが、その後減少傾向です。人口が最も多かった昭和 60（1985）年には、1 世帯当たり人員は 3.18 人でしたが、令和２（2020）年には 2.31 人となっています。

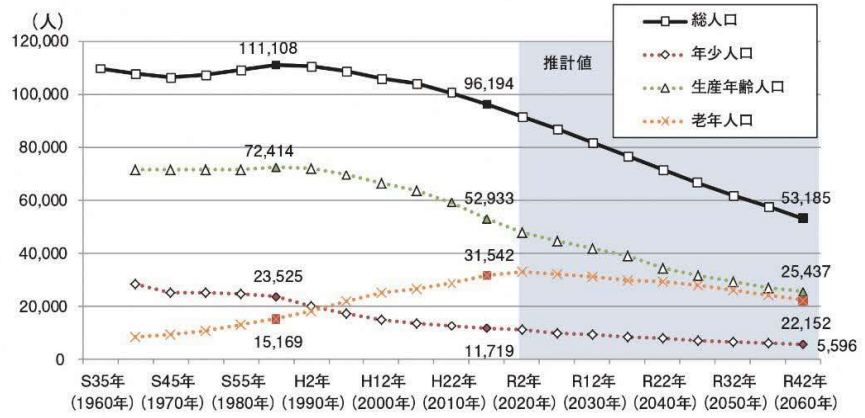
三原市人口ビジョン（改訂版）（令和２年３月）の将来推計によると、現在の傾向で人口が減少した場合、令和 42（2060）年には 53,185 人にまで減少すると予測されています。



人口の推移（国勢調査）



世帯数・世帯当たり人員の推移（国勢調査）



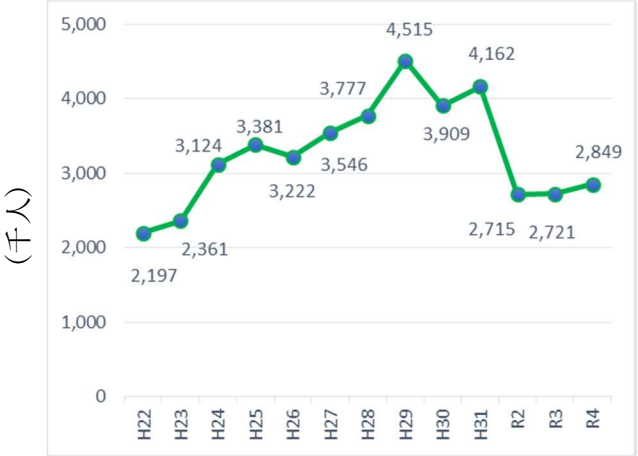
出典：S35（1960）年～H27（2015）年…「国勢調査（各年10月1日）」総務省
R2（2020）年～R42（2060）年…「内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局提供ワークシート（令和元年6月版）に基づく推計」
※S35（1960）年は，年齢3区分別人口は非掲載。
※H27（2015）年は，国のワークシートの数値に準拠。

将来人口の推計（三原市人口ビジョン）

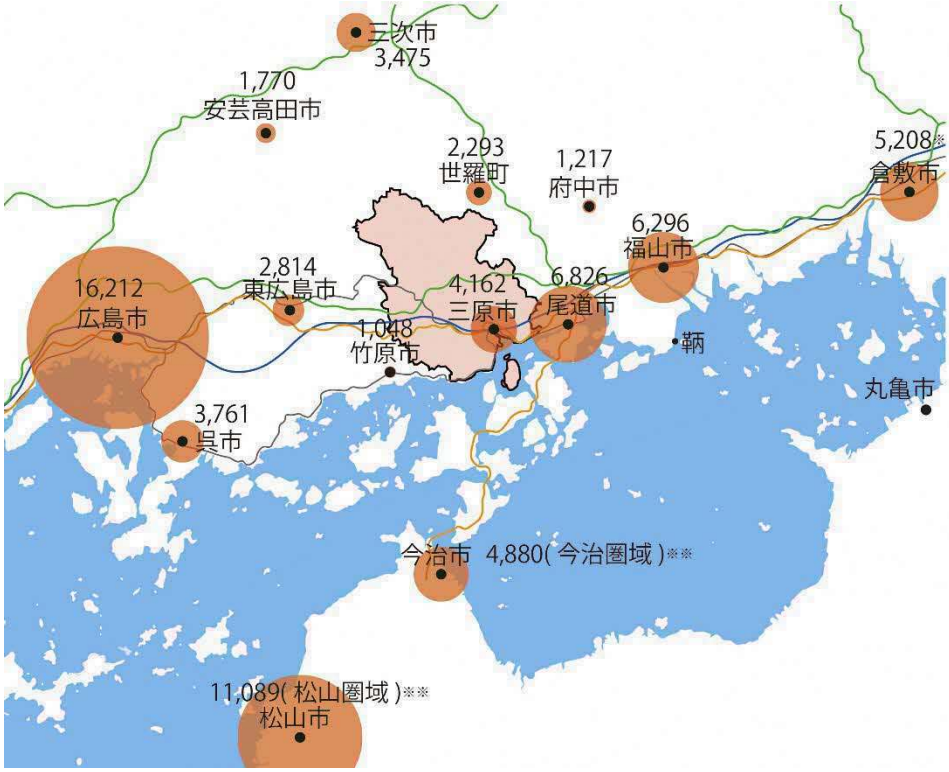
（２）観光客数

三原市の総観光客数は、平成 24（2012）年から大きく増加しており、平成 29（2017）年には過去最高の 450 万人が訪れました（県内６位）。これは、道の駅「みはら神明の里」のオープン、瀬戸内しまのわ 2014 の開催（平成 26〔2014〕年）、瀬戸内三原 築城 450 年事業（平成 28〔2016〕年、平成 29〔2017〕年）など観光振興の切れ目ない取組によるものと考えられます。

行事では、令和元（2019）年の三原やっさ祭り（40 万人）、三原神明市（32 万人）に多くの観光客が訪れています。なお、令和２年度以降は新型コロナウィルス感染防止対策のためイベントの中止や規模縮小が続いており、観光客数は大きく減少しています。



観光客数の推移（「広島県観光客数の動向」）



市町村ごとの観光客数（平成 31〔2019〕年、広島県・岡山県・愛媛県統計、単位：千人）

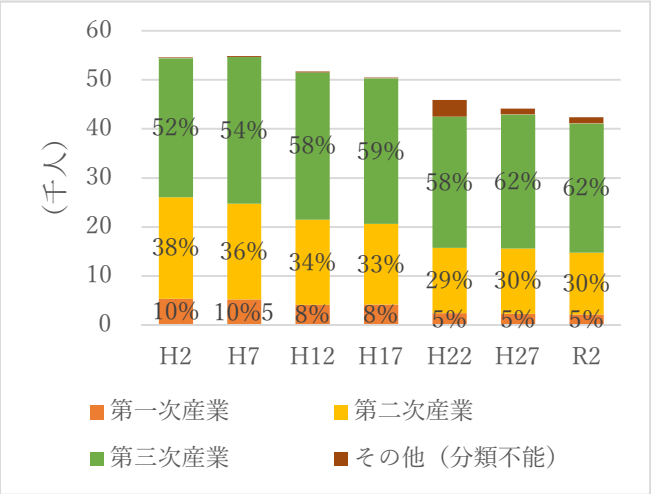
主な観光施設などの観光客数（市資料から、単位：人）

施設名称など	H29	H30	H31	R2	R3	R4
筆影山・竜王山（花見含む）	76, 930	74, 120	79, 630	59, 090	83, 289	66, 420
佐木島	19, 000	19, 400	19, 900	16, 400	19, 500	22, 800
三原城跡	73, 233	44, 073	60, 881	11, 254	8, 610	2, 569
佛通寺（参拝、紅葉狩り）	80, 453	68, 066	72, 415	64, 674	62, 161	70, 121
御調八幡宮（初詣他）	50, 000	30, 000	25, 000	30, 000	28, 000	20, 000
すなみ海浜公園(海水浴他)	58, 106	43, 624	52, 718	45, 279	34, 000	46, 000
県立中央森林公園	172, 743	160, 418	167, 878	145, 631	157, 384	163, 727
三景園	89, 257	94, 182	88, 722	76, 369	72, 416	74, 573
果実の森	49, 052	40, 564	38, 731	36, 091	38, 594	15, 055
みはら歴史館（平成 31 年閉館）	45, 316	26, 226	18, 825	－	－	－
三原神明市	319, 900	327, 800	320, 100	397, 000	中止	中止
三原さつき祭り	110, 000	77, 000	85, 000	中止	中止	1, 275
三原やっさ祭り	450, 000	250, 000	400, 000	中止	中止	21, 000
三原浮城まつり	150, 000	50, 000	70, 000	中止	11, 500	9, 000
道の駅「よがんす白竜」	199, 010	172, 208	176, 100	193, 696	196, 000	188, 670
道の駅「みはら神明の里」	516, 384	468, 224	496, 718	509, 588	635, 654	634, 834

（３）産業

就業者数は、令和２(2020)年では、42, 353人となっています。平成７（1995）年の54, 818人以降、減少傾向にあります。

構成比率をみると、令和２(2020)年では、第１次産業が５％、第２次産業が30％、第３次産業が62％となっています。第１次産業、第２次産業が減少する一方、第３次産業が増加傾向にあります。



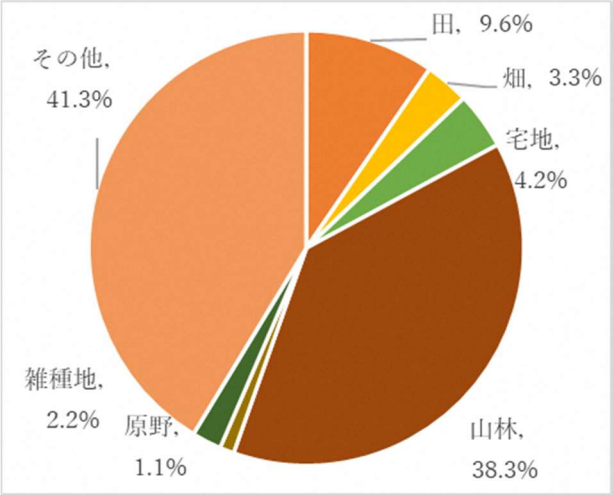
産業別人口（国勢調査）

（４）土地利用

市域の土地利用について用途別に面積をみると、「その他」を除けば、「山林」が最も多く 180.65km^2（38.3%）であり、次いで「田」が 45.27km^2（9.6%）、「宅地」が 19.99km^2（4.2%）の順となっています。

用途	面積（km^2）	割合（%）
田	45.27	9.6
畑	15.48	3.3
宅地	19.99	4.2
山林	180.65	38.3
原野	5.01	1.1
雑種地	10.33	2.2
その他	194.82	41.3
総面積	471.55	100

※その他は道路、河川、水面、水路、公共施設、無番地などを含みます。



用途別土地利用面積（平成 29［2017］年度　土地利用に関する概要調書報告書）

（５）交通

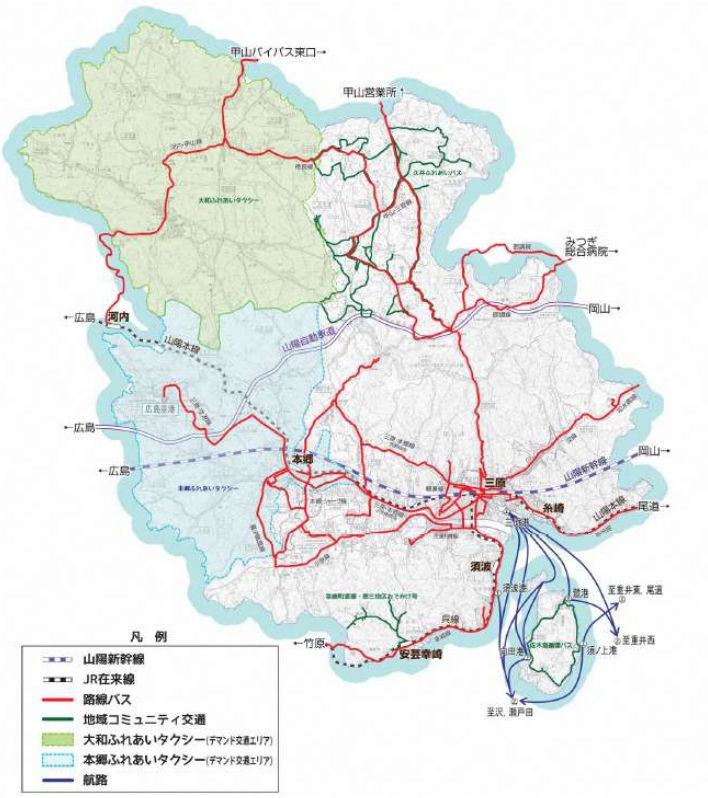
三原市は、JR三原駅、山陽自動車道三原久井IC･本郷IC、重要港湾尾道糸崎港、広島空港など広域交通拠点が集積しており、交通環境に恵まれています。

鉄道は、JR山陽新幹線・JR山陽本線・呉線が通り、JR三原駅で連絡しています。

道路網は、山陽自動車道と国道２号・185号・432号・486号及び主要地方道三原東城線（県道25号）などにより、地域内外を繋いでいます。

バスは、三原駅をターミナルとする広域的なネットワークが形成され、広島空港から福山駅などを結ぶ高速バス路線が停車します。

港は、重要港湾尾道糸崎港に含まれる三原港及び地方港湾須波港を発着する航路網が整備されています。



三原市の公共交通網
（「三原市地域公共交通網形成計画」）

広島空港は、中国地方最大の利用客数が

あり、羽田、成田、新千歳、仙台、那覇を結ぶ国内線に加えて国際線も運行しています。

（６）災害

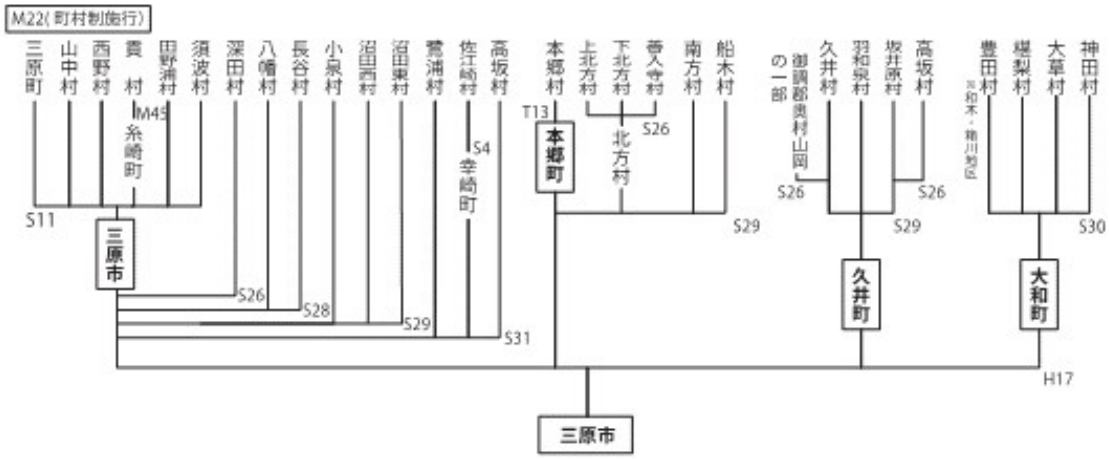
市内には、土砂災害や洪水・津波などによる災害リスクが高い区域があります。三原市では、土砂災害（特別）警戒区域及び津波災害警戒区域など、ハザードマップを作成しています。土砂災害特別警戒区域 2,812 箇所、土砂災害警戒区域 3,125 箇所を指定しており、沼田川などの流域では洪水を、沿岸部や沼田川・天井川の河口部では津波を想定しています。

平成30（2018）年７月の西日本豪雨災害では、河川の氾濫、土砂災害により緊急輸送を担う道路網も被災し、市民生活に甚大な影響を及ぼしました。地震に関しては平成13年の芸予地震以来、大きな地震はないものの、近い将来発生すると予想される南海トラフ地震についても備える必要があります。

（７）市域の変遷

平成17（2005）年３月に、旧三原市、旧豊田郡本郷町、旧御調郡久井町、旧賀茂郡大和町が合併し、現在の三原市が誕生しました。

なお、市域は備後国、安芸国にまたがっており、旧三原市の西国街道には国境の石碑があります。



三原市を構成する旧町と旧村

国境の石碑

市域の構成

３　歴史的背景

（１）原始・古代

今から１万年前までの三原市は、寒冷な気候でした。これまで和田沖の海底から底引き網でナウマンゾウなどの化石骨が引き上げられていることから、瀬戸内海は現在よりも海面が低く、陸地が広がっていたと考えられます。

旧石器時代（12,000 年前まで）の遺跡として、ナイフ形石器が出土した苏原垣内遺跡（久井町）や、宿禰島の西側斜面で頁岩製の剥片が見つかった宿禰島遺跡（鷺浦町）が知られています。

縄文時代（12,000 年前～2,400 年前頃）になると、気候はしだいに温暖となり、氷河が解けて海水面が上昇し、瀬戸内海を形成しました。現在の糸崎町の標高 10～20ｍの丘陵上に位置する大将軍遺跡（糸崎町）や天神山遺跡（糸崎町）などで縄文土器が見つかっています。また、標高 20m に位置する貝持貝塚（小坂町）では、海水産に淡水産の貝類が混じり、当時は海や川に面した場所で人々が生活をしていたことがうかがえます。

弥生時代（紀元前３世紀～紀元後３世紀前半）になると、朝鮮半島から稲作文化が伝わり、稲作や金属器の使用が始まりました。陣べら遺跡（本郷北）では、竪穴住居跡２基、土壙墓・木棺墓11 基、壺棺墓２基が見つかっています。また、弥生時代後期になると標高 150ｍ前後の丘陵頂上や丘陵稜線に新庄庵遺跡（下北方）のような、平野や海川を見渡す場所につくられた高地性集落遺跡が見られるようになります。

古墳時代（３世紀後半～７世紀）は前期、中期、後期、終末期に分かれ、沼田川流域を中心に古墳が出現してきます。

前期の古墳は、鍛冶屋迫第４号古墳（上北方）・宮ノ谷第８号古墳（沼田東町）・みたち第５号古墳（本郷南）などがあります。

中期の古墳は、福礼古墳（本郷町南方）・鳩岡古墳（沼田東町）・県史跡の兜山古墳（沼田東町）などがあります。

後期・終末期の古墳は、沼田川支流の尾原川流域に集中しています。国史跡の御年代古墳（本郷町南方）は、花崗岩の切石による精美な横穴式石室で、前室・後室の複室構造でそれぞれに刳抜式家形石棺が納められています。金環・馬具・装飾須恵器などが出土しており、７世紀中頃に築造したと推定されます。県史跡の梅木平古墳（下北方）は、県内最大規模の横穴式石室を有し、その構造から７世紀初頭に築造されたと推定されます。また、県史跡の貞丸古墳は、石室内に凝灰岩（兵庫県高砂市産・竜山石）

梅木平古墳

製の刳抜式家形石棺の身部があります。二本松石棺（本郷町南方）や溜箭古墳（沼田西町）からも同様に凝灰岩製の石棺が見つかっており、畿内の中央政権との強い繋がりを有した勢力がこの地域に存在したと考えられます。

飛鳥時代になると、日本では仏教が広まってきました。毘沙門山下遺跡（本郷北）からは、県内最古とみられる飛鳥時代の素弁蓮華文の軒丸瓦片が出土していますが、寺院跡の存在は明らかになっていません。また、7世紀中頃に建立されたと推定される国史跡横見廃寺跡（下北方）は、東西 100m、南北 70m の寺域が想定されます。発掘調査により建物基壇跡・回廊跡・築地跡が確認され、素弁蓮華文軒丸瓦（山田寺式）・パルメット文軒丸瓦などが出土しています。

古代律令制度下において、都と大宰府を結ぶ幹線であった「古代山陽道」は、現在の八幡町を通り高坂町真良から本郷町南方を経由していたと考えられます。

横見廃寺跡

奈良時代には、律令制度に基づく中央集権の国家体制が整備されていきました。奈良・平安時代になると、久井地域では窯跡がみられます。小林第1号窯跡（久井町）や熊ケ迫窯跡群（久井町）などは、8世紀から 11 世紀頃にかけて官営の窯跡群として、継続的に操業されたと考えられます。

宝亀8（777）年には藤原百川が使いを派遣して社殿を建てたと伝わる御調八幡宮（八幡町）が創建されました。同宮には、9世紀から 10 世紀の作とされる国重要文化財木造僧形八幡神坐像をはじめとする神像が数多く残されています。

現在、寺は失われていますが、善根寺収蔵庫（小坂町）には、県重要文化財の木造日光菩薩立像・木造月光菩薩像をはじめ、平安時代の仏像が多く残され、地元の人たちによって守り伝えられています。

（2）中世

沼田荘は、安芸国沼田郡の沼田川流域に広がった荘園です。荘園の成立の経緯は不明ですが、沼田氏がこの地の荘園を開発し、その後、蓮華王院（三十三間堂で知られる、京都の寺院）へ寄進しました。沼田氏が平氏とともに滅亡し、その後小早川氏の祖土肥実平が沼田荘地頭となり、ここに在地勢力としての小早川氏の発展が始まりました。

新高山城跡（左）高山城跡（右）

県重要文化財『東禅寺文書』の「地頭尼某下知状」には、沼田荘地域の政治や宗教の在り方、荘園や名田の経営実態記録が残っており、地頭が権力を示していた様子を知ることができ

ます。

小早川氏が沼田荘に根を下ろしたのは、４代茂平の時代です。

茂平は、高山城（高坂町、本郷町）を築き、隆景が新高山城（本郷町）に移るまで本拠としました。さらに茂平の代に在地勢力として根づき、有力御家人として活躍する一方、沼田川下流域に広がる塩入荒野を干拓し、巨真山寺（現在の米山寺）を氏寺として勢力を拡大していきました。

佛通寺

小早川氏は沼田荘の本荘（現在の三原市西部及び南部の地域）だけでなく、沼田川支流の椋梨川一帯に展開する新荘にも勢力を伸ばし、承久の乱の後には、さらに都宇・竹原荘（竹原市）の地頭職も手に入れています。

沼田川流域には、「沼田市」が形成されました。沼田川の右岸（南側）に位置するのが本市（沼田東町）で、沼田川をはさんだ対岸には新市（長谷町）が開かれました。この両市が繁栄したのは、小早川氏による他地域との商業活動と関わりがあると考えられています。

小早川９代の春平は、京都の高僧愚中周及を招いて応永４（1397）年に佛通寺（高坂町）を創建しました。

この頃の三原を代表する産業には、農業以外に鋳物と刀剣、塩があります。刀鍛冶は、いわゆる三原物として尊重される刀を打っており、その門派は三原だけでなく備後南部一円に広がっていました。

（３）近世

三原城跡

小早川 17 代の隆景は新高山城（本郷町）を本拠地としましたが、永禄 10（1567）年頃から、瀬戸内海に面した三原城の造営に着手しました。織田氏と毛利氏が対立したとき、三原城には毛利氏の本営が一時置かれ、毛利輝元が在城しました。

三原城は、三原湾内の大島・小島を連ねて築かれたとされており、その東側に城下町が形成されました。豊臣政権下の大名となった隆景は、後に筑前の所領を秀秋に譲って三原に引退し、三原城の本格的修築と佛通寺の修復に力を注ぎました。しかし隆景が慶長２（1597）年に急逝すると、三原は毛利氏直轄領となり、隆景配下の三原衆も離散していきました。

慶長５（1600）年の関ケ原の戦いの後の福島氏の時代には、西町の町割りが行われ、隆景時代に整備された東町と併せて、三原町と称されました。

三原町の町割りは、町の中央を東西に通じる山陽道（西国街道）の道幅を３間とし、その南北それぞれ 20 間を町分（町方）としました。なお、江戸時代の三原は広島藩の領内でした。

福島氏の改易後、元和５（1619）年には、新たな広島藩主浅野長政（あさのながまさ）の従兄弟の浅野忠吉（ただよし）が三原城主となり、その後も三原浅野氏が代々城主となりました。三原浅野氏は３万石の給地を与えられ、広島藩の家老職であったことから、広島に常住しました。三原には 70 人余の家臣がおり、三原町及び給地の統治を行いました。

三原の商人は、年貢米を運んできた人々を相手として、商業活動を行っていました。旧暦正月 14 日の東町一帯で行われる神明祭は、天正期（1573～1592）から始まり、賑わいを現在に伝えています。

三原の地は山が海にせまり、平坦地が少なかったため、干拓が盛んに進められました。なかでも最大のものは元禄 13(1700)年に開かれた宮沖新開で、この年には東町の沖に塩田も作られました。

江戸～昭和時代の干拓地図

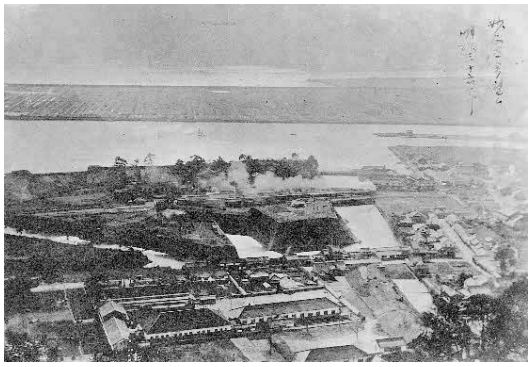
近世の三原の代表的産物は酒で、これは「庭訓往来（ていきんおうらい）」にもみられ「三原酒（みはらざけ）」として将軍に献上されました。酒造業者の多くは町役人も務め、経営の安定をはかるため、不動産（家屋）に投資もしました。周辺の村々の特産品としては、煙草・大根・焼梅・ゴボウ・綿などが知られていました。

元禄 11（1700）年頃から、大和町下草井では、広島藩献上茶「鷹の爪」が生産されていました。また、久井の牛市は延宝年間（1673～1681）には、広島藩の公認となり、陰暦９月に秋市が開かれ、当時の生活に欠かせない牛馬の取引が行われていました。

杭の牛市跡

（４）近・現代

明治時代に入ると、明治２（1869）年、版籍奉還（はんせきほうかん）の結果、広島藩主浅野長勲（ながこと）が広島藩知事に任命されました。明治３（1870）年、三原城は広島の本藩へ返還され、三原浅野氏による統治はここに終わりを告げ、明治４（1871）年には廃藩置県が行われました。その後、三原城内の建物や樹木の入札が行われました。


明治時代の三原駅と三原城跡

明治 25（1892）年には、日本と清国との間の外交関係の急迫により山陽鉄道の敷設が急がれ、三原停車場（現在の糸崎駅）が設置されました。明治 27(1894)年、三原町では旧三原城本丸跡地に、三原停車場が開業し、これまでの三原停車場は糸崎停車場と改められました。

江戸時代末期に築かれた松浜港は、糸崎港と改められ、明治 32（1899）年に特別貿易港に指定されました。

明治８（1875）年、宮沖新開の南に皆実新開がつくられ、その後、宮沖新開の東に円一新開がつくられて、米・麦・綿・野菜・果物などが栽培されました。

大正時代に入ると、水運の便と豊富な水と工業用地を背景として、大正６(1917)年に三原ラミー紡績株式会社（後のトスコ株式会社三原工場）、昭和７(1932)年に日東セメント株式会社糸崎工場（後の山陽白色セメント株式会社）、昭和８(1933)年に帝国人造絹糸株式会社三原工場（現在の帝人株式会社三原事業所）が次々に進出し、三原は城下町から、近代産業都市へと大きく転換していきました。

一方、教育施設は、明治 33（1900）年、私立三原教員養成所が館町に設立され、明治 42（1909）年には広島県三原女子師範学校が開校しています。

昭和時代になると、昭和２(1927)年には呉線（旧三呉（さんご）線）の建設が始められ、昭和 10(1935)年には全通しました。また、戦時体制が強化されていくなかで、昭和 18(1943)年、

三菱重工業株式会社三原車両製作所（現在の三原製作所）が機関車や貨車を中心に製造する工場として稼働し、主として貨物用の機関車であるD51型が生産されました。工場の稼働に伴い人口増加、居住地域拡張が進みました。

終戦後の昭和39（1964）年、三原市は備後工業整備特別地域に指定されました。昭和43（1968）年には沼田川総合開発事業として、沼田川水系椋梨川に椋梨ダムが竣工しました。昭和50（1975）年には新幹線三原駅が開業し、平成5（1993）年に広島空港が開港しました。また同年、三原市を通過する山陽自動車道が開通し、本郷、三原久井インターチェンジが設けられました。

平成17（2005）年3月22日に、三原市、豊田郡本郷町、御調郡久井町、賀茂郡大和町の一市三町が合併し、新三原市が誕生しました。

「みはら」の地名はいつから？

平安時代中期（931～938）につくられた国語辞書兼百科事典である「倭名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）」の郡郷名の中に「柞原（みはら）　美波良（みはら）」とあるのがみられます。

三原の地名の記載が残る、現存する最古のものは、松山市の石手寺（いしてじ）にある嘉元4（1306）年の銘がある鉄製燈籠台座で、「備後国三原之大工津守守真」と鋳込まれています。

また墨書（ぼくしょ）された最古のものは、世羅郡世羅町の永寿寺（えいじゅじ）蔵に所蔵される永和2（1376）年から4年がかりで書写された大般若経（だいはんにゃきょう）の奥書であり、「備後国御調郡三原金剛寺」とあります。そうしたことからも、1300年代にはすでに、「三原」と表していたことをうかがい知ることができます。

注釈）　旧石器時代・縄文時代・弥生時代の年代については、異なる見解を示す学説もあります。